

西本3・4号遺跡見学会資料



1997年11月15日(土)

財団法人東広島市教育文化振興事業団
東 広 島 市 教 育 委 員 会



No 2 (竪穴住居跡) 焼けた住居

2 見つかった遺構

今回の調査では、^{たてあなじゆうきよあと}竪穴住居跡12軒、^{だんじよういこう}段状遺構7基、^{みぞじよういこう}溝状遺構2条、^{せつかんぼ}石棺墓1基、^{もつかんぼ}木棺墓1基、^{ちようぞうけつ}貯蔵穴1基の他、多数の柱穴群が見つかりました。

*図面にN9というように表記されているのは、調査順に番号をつけていったものなので、この場合この遺跡で9番目の遺構という意味です。

竪穴住居跡

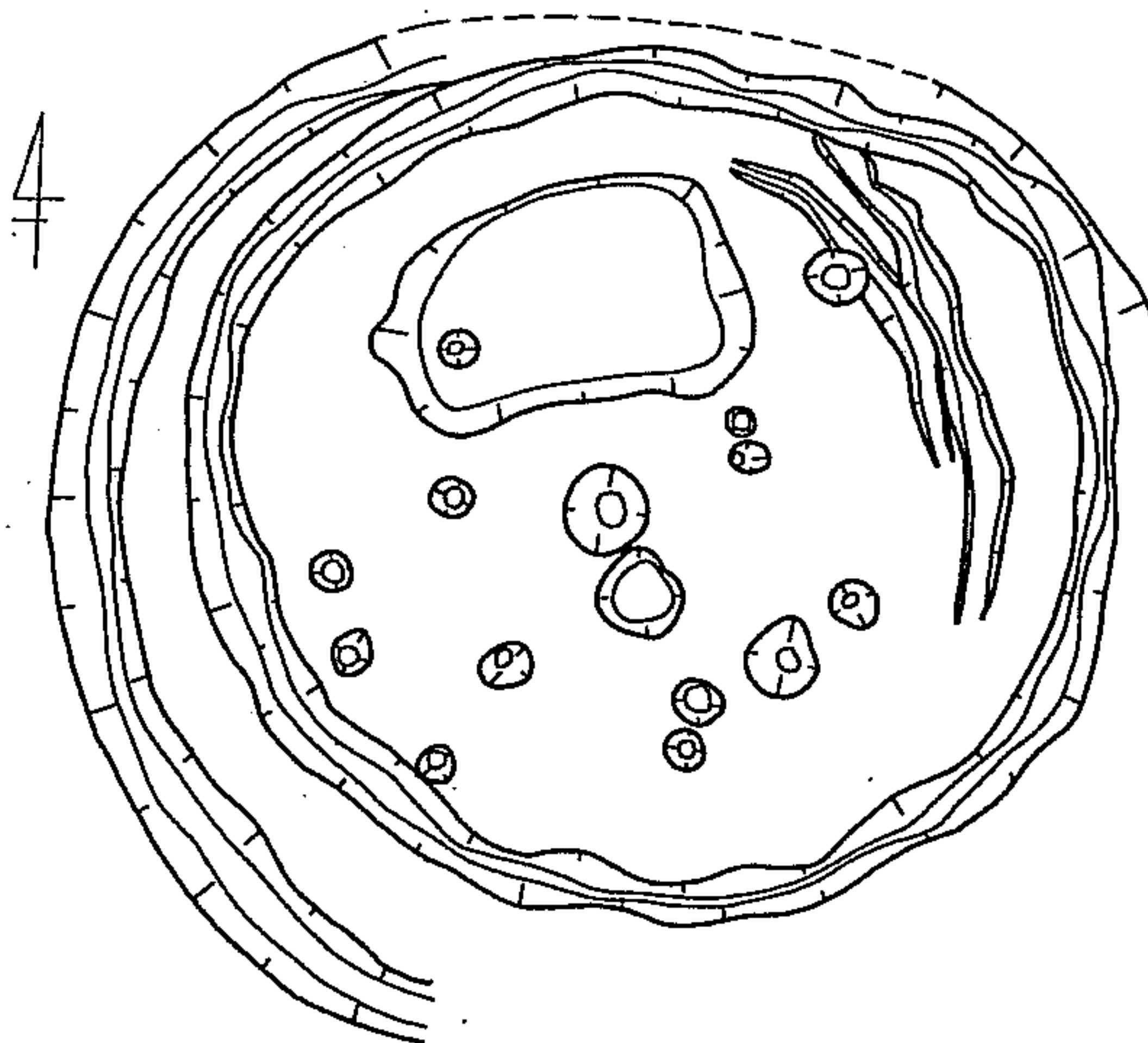
No.1 (竪穴住居跡)

平面形は円形です。すでに南側はくずれていますので、骨組みとなる柱の正確な数は不明ですが、現在残っているものは6本です。また住居の中心には^ろ炉跡と思われる穴があります。住居の床面には、普通壁ぎわに掘られている溝が幾重にも掘られていることから、数回にわたって建替えが行われていたことが分かりました。また、この住居跡は南側にあるNo.4 (竪穴住居跡) と重なっていますがそれよりも後につくられたことが確認されました。

なお、時期は弥生時代後期と考えられます。

No.9 (竪穴住居跡)

平面形は円形で、最低でも2回の建替えが行われていることが分かっています。床面には^{どこう}土壌(約1.8m×1.2m)が掘られていました。これは、住居内で使用された貯蔵穴(穀物などを貯えておく穴)と考えられ、中からは^{いし}砥石が出土しました。この貯蔵穴は土の埋まった状況から、建替えの際に人為的に埋めたのではないかと考えられます。時期は、弥生時代後期と思われます。



No.9 竪穴住居跡平面実測図 (1:60)

№ 7 a (竪穴住居跡)

平面形は隅丸方形です。住居の壁ぎわからはミニチュア土器（生活用品で使う土器よりもずっと小さい土器）が出土しています。また埋まった土の様子から、№ 7 aをいっせいに埋めた後に新たに№ 7 bを造っています。こうしたことからこのミニチュア土器は地鎮のために使用したのではないかと考えられます。

№ 7 b (竪穴住居跡)

住居跡の西側は、削平を受けていますが、住居の中央には炉跡が見つっています。

この住居跡は、西本3・4号遺跡のなかでも一番大きい住居跡です。時期は№ 7 a bとも弥生時代後期と考えられます。

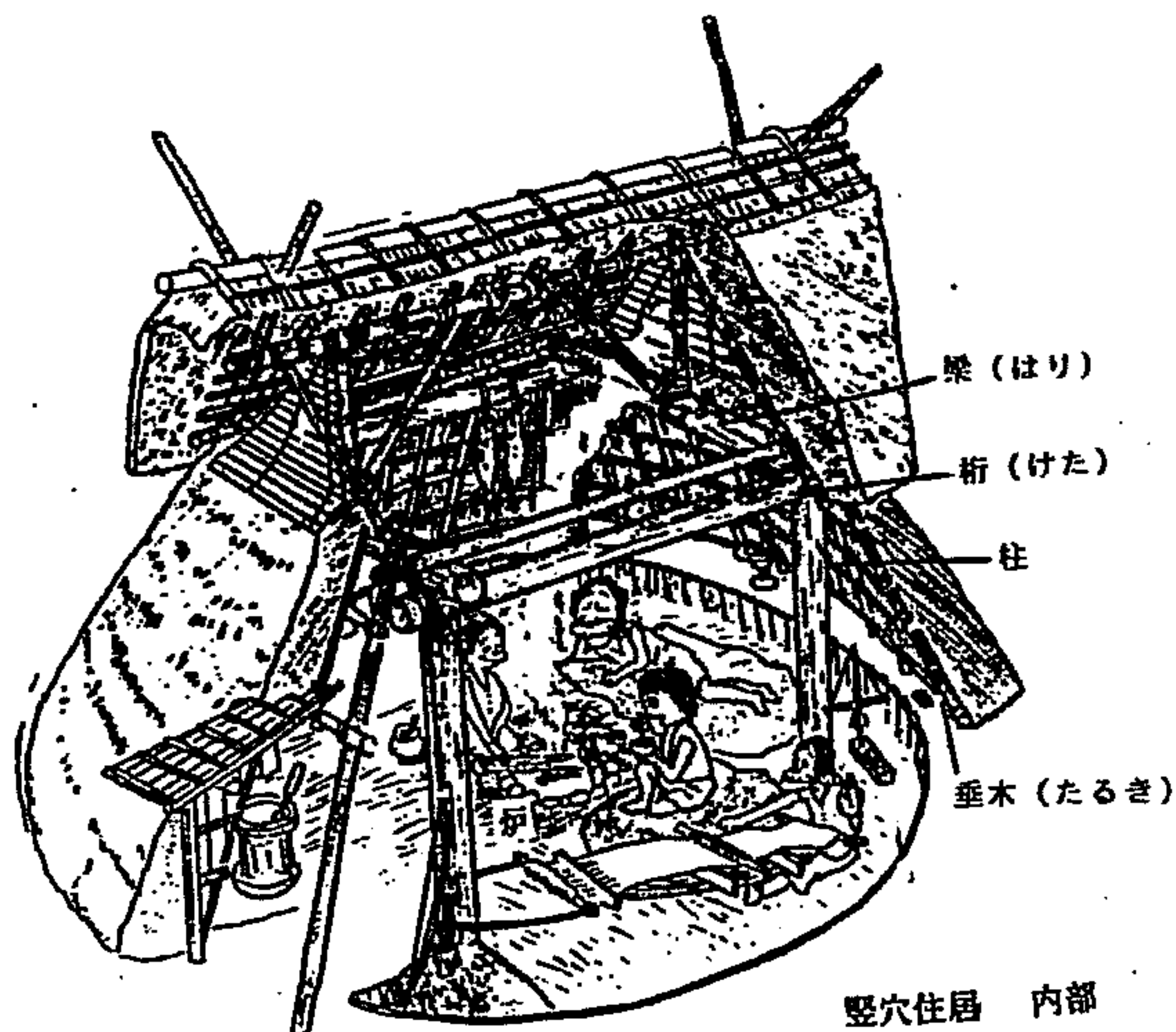
墳墓

№ 2 3 (木棺墓)

上面はすでに削平されていますが、長方形の墓^{ぼこ}のなかに、木棺の痕跡が残っています。遺物が確認されていないため、正確な時期は不明ですが、住居跡とほぼ同じ頃に造られたと考えています。

№ 2 4 (石棺墓)

現在調査中のため、詳しいことは不明です。この石棺墓はすでに蓋^{ふた}石はありませんでしたが、側壁の石は残っています。また、床には石が並んでおりこの上に遺体を埋葬したと考えられます。

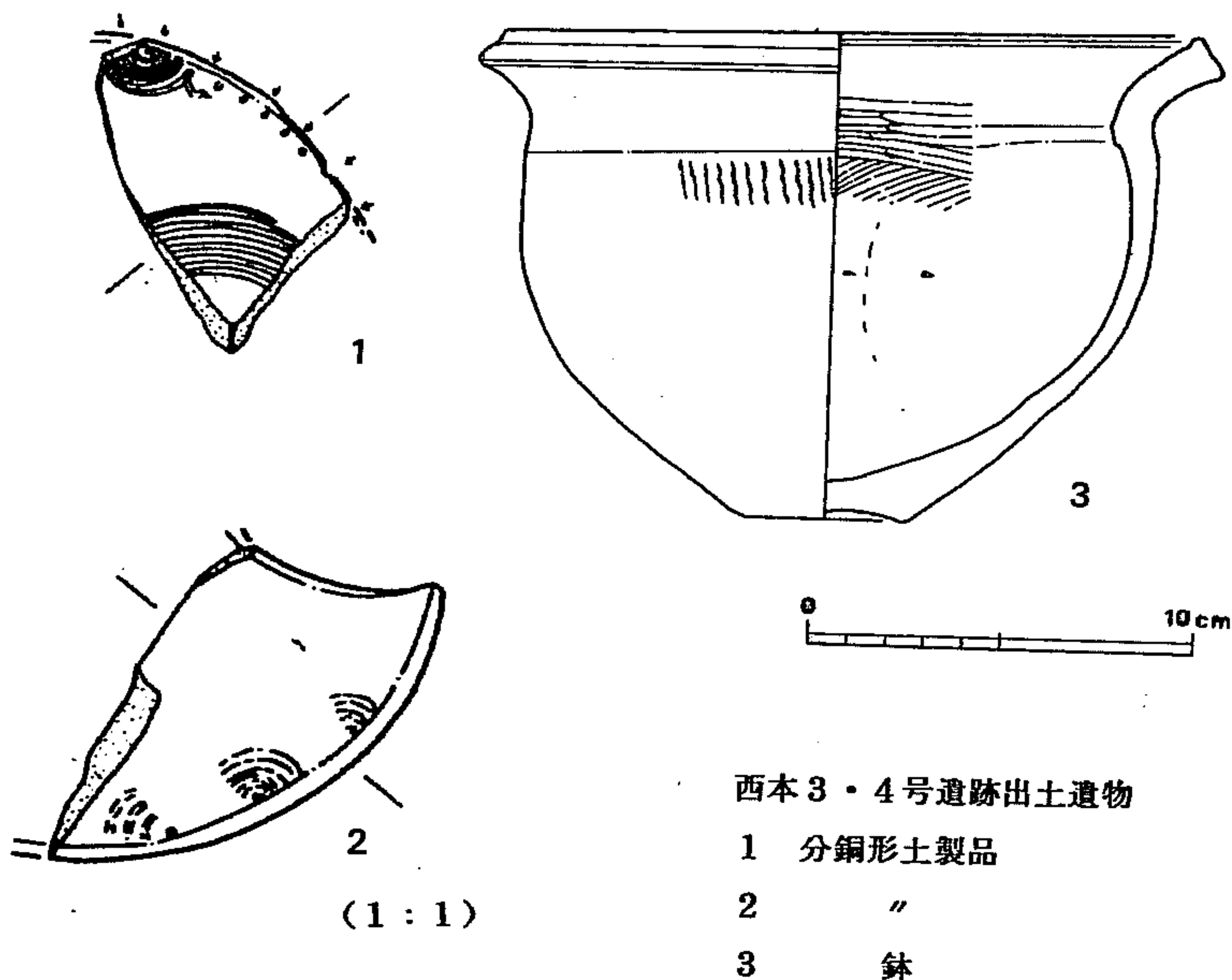


3 出土した遺物

西本3・4号遺跡からは、多量の弥生土器の他に石器、^{くだま}管玉が出土しました。

弥生土器は、日常生活で使用する甕・壺・鉢が中心ですが、中にはマツリなど使ったと思われるミニチュア土器、^{ぶんどうがたどせいひん}分銅形土製品なども出土しています。

石器は、^{せきぞく}石鏃、^{せきふ}石斧・^{すりいし}磨石、^{といし}砥石・^{だいし}台石が出土しています。



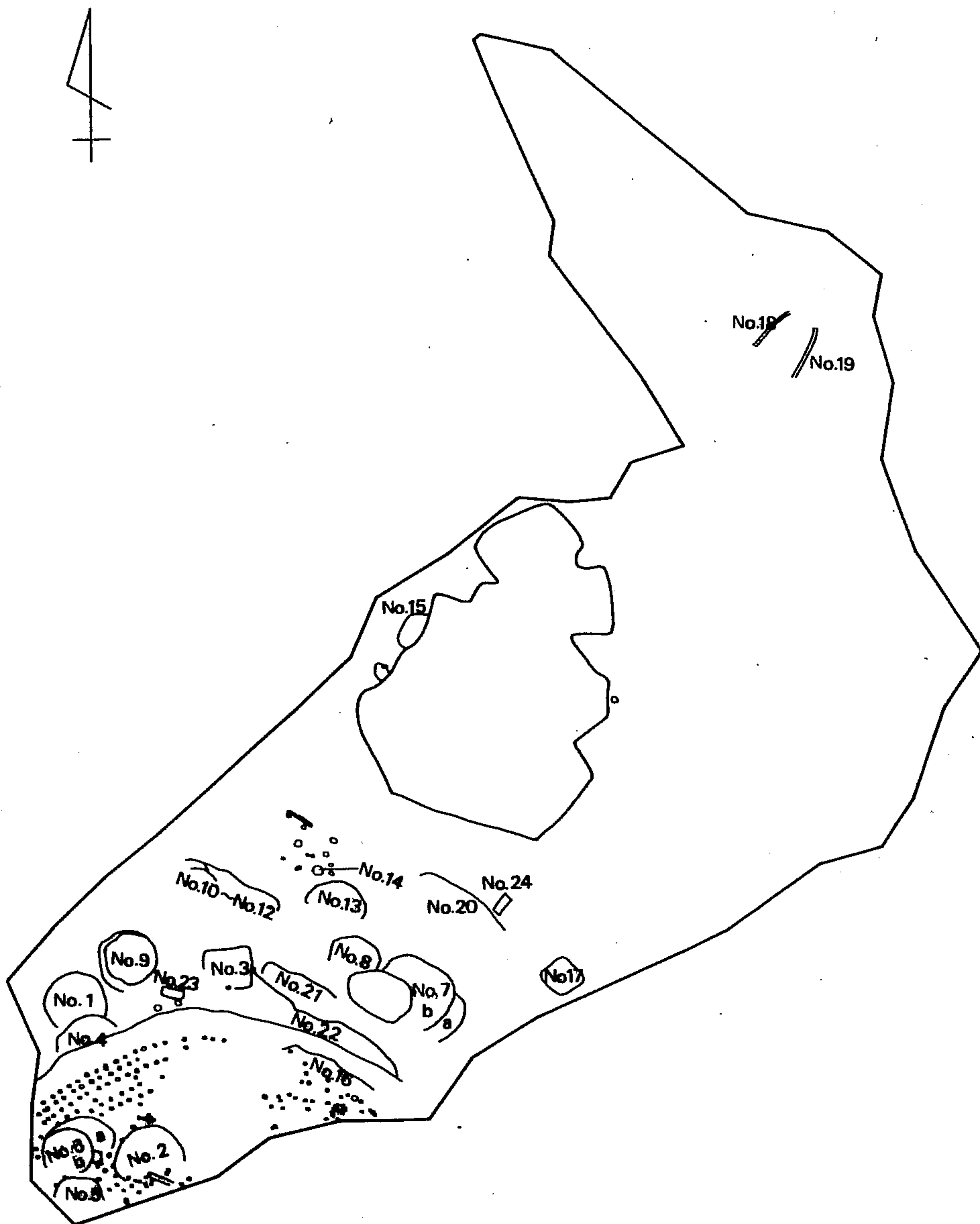
4 おわりに

西本3・4号遺跡は、丘陵斜面を造成した上に営まれた集落跡です。時期は弥生時代後期（約1,800年前）ですが、古墳時代の遺物も出土しています。

尾根の頂上付近には、後世に瓦粘土の採取で大きく掘削されて遺構が壊されていますが、住居跡の一部は残っています。そうしたことから西本3・4号遺跡は、比較的規模の大きい弥生のムラであったことが想像出来ます。

また調査区の西側には地形に沿って柱穴群が並んでいます。この柱穴群がどのような目的で使用されていたのかは現在検討中です。

なお今年度中には、調査区の南東側を一部調査するため、今後の発掘調査によってよりいっそう西本3・4号遺跡のムラの様子が明らかになることでしょう。



遺構配置図 (1 : 500)

